

馬場孤蝶

緑雨と一葉

緑雨と一葉

上

樋口一葉の晩年には、斎藤緑雨が余程親しく交際した。一葉の病が重ると、緑雨が森鷗外氏に頼み、森氏の紹介で青山胤通たねみち氏に一葉の病状を診察して貰ったのだと聞いて居る。

一葉が亡くなると、緑雨と戸川秋骨とが、樋口家の為めに、いろいろ骨を折った。

福山町へ曲る田町の右角のところだが、当時は瘋癲病院であつた。その病院の夜警の太鼓というのが実に厭な陰気な音であつた。緑雨は一葉の棺前で通夜をして居る時に、「霰る田町に太鼓聞く夜かな」と口吟んだというのだ。

旧版の一葉全集は緑雨の校訂及び校正になつたもので、誤植が殆ど一箇所も無い位に善く出来て居たのである。その巻頭にある「一葉女史、樋口夏子君は東京の人也云々』という緒言は緑雨の筆になつたものだ。

一葉の日記『水のうへ』の一月——明治二十九年——のところには、

「正太夫のもとよりはじめて文の来たりしは一月の八日なりし」

とあって、その手紙の要綱が書いてある。それから、その次には、

「九日の夜書ききたる文十日にとゞきぬ。半紙四枚がほどを重ねて原稿書ききたるがごと細かに書したり」

とあって、又その手紙の要綱が挙げてあって、
「一覽の後は其状かへし給はれ、君よりのちかへしまつるべし、世の人聞きうるさければ、となりけり。直に封じてかへしやる。」

とある。で、此の時分は、緑雨は一葉にまだ面識がなかったのだ。所で、此の二通の手紙は、緑雨の請求に依って、緑雨の手許へ返したと日記には書いてあるのだから、その全文は今日では知ることが出来ない訳であるのだが、実際はその全文を此所に載せ得るのだ。僕はこれを樋口家から得て来たのだ。

一葉はその手紙を緑雨に返す前に、妹の邦子に読ませ、大急ぎで書き取ってしまったのだそうである。これは、日記には、

「正太夫は、かねても聞けるあやしき男なり。今文豪の

名を博して、明治の文壇に有数の人なるべけれど、其しわざ、其手だて、あやしき事の多くもある哉。しばらく記してのちのさまをまたんとす」

とある通り、後日の証拠にもという意味でもあったのであろうが、又一方ではいたずら半分の心持もあつたのだらうと想像される。一葉の氣質がそういうところにも表われて居て甚だ面白い。

最初の手紙即ち九日に来たというのは、次の如きものである。

「われは申すまでもなく君に所縁あるものに候はず、

唯わが文界の為に君につげ参らしたくおもふ事二つ三つ有之候、筆にてすべきか口にてすべきか、但し我れに一箇の癖あり、われより君を訪ふ事を好まず候、きゝ給はんとならばいかなる親しき人の間にも必らずよく秘密を保たるべき事を先づ誓はれ度候、然らざれば君に不利なりと信じ候により
勿論強てには及ばず、われも又強いて人の為に言をすゝめんにも候はねば

正太夫

「一葉様」

此の手紙の写しの末に、一葉は此の手紙が使者でとどいたものであることを記して居る。緑雨は此の時分は本郷弓町あたりに居たのではなからうかと思う。

一葉が緑雨の此の手紙に対して出した返事は次の如きものである。

「御ふみ拝し参らせ候、御親もじの御意身にあまりて有がたく、人には得こそもらすまじく候まゝ、ひたすら御申聞け願度、たゞちに参上御ひざもとにてと飛びたつ様に存じ候へど、男ならぬ身なれば、さるかたに御見ゆるし、御教へのいたゞかれ候やう神かけねんじ

参らせ候、御返事のみを

あらくかしこ

一月九日

斎藤様

御前に」

日記に「何事かは知らねど此皮肉家がことかならずを
かしからんとて返してやる」とある返事がこれである。
今日の人々に比べると、感情を包む修練が前代の人々に
は出来て居たのだ。

中

緑雨の手紙——九日に書きたるものという——は、可なりな長文である。便宜上二つに割ることにする。

「おそく帰り候処、御返書参り居り拝見いたし候さらば、我が思ふよし遠慮なく可申上候、もとより筆にてと存じ候なれども、乍失礼御心入いかゞと存じ、わざと御尋ね申上げたるに候

凡そ人間の交りの上に於て、ためすなどゝ申すは甚だよろしからざる事に候、こゝに我れは実を吐いて、ま

づ御詫申上置候

さてこれより『二つ三つ』の本文に候へども、女性に
対し甚だ申しにくき事を申すにて候へば、無論失礼は
覚悟の上に候、尤も礼とは一種の規則に有之、飾るを
以て礼とは心得不申、おもひ切つて飾らざるわが言葉
の裡に何ものか探りあて給ふあらば幸ひと存候

ことさらに君と呼び申候、君が名は、改進なりしか武
蔵野なりしか忘れたれど、我れは早くより承知致し居、
其後『たけくらべ』『ゆく雲』等を読みて（但全篇通
してにはあらず）多分御同人と推し、其筆いたく上り

給へるに驚き候

『にごり江』出で、御名の余りに評論界にかしましきより、われも窃に注意致居候処、『わかれ道』に至つて、昨日の如き書面をさし上ざるを得ざる次第と相成候

何となれば、『わかれ道』に於てぞ明らかに御作の漸く乱れんとするの（乱にあらず寧ろ濫也）傾向あるをみとめ得らるべく候、どこをとさす事は今暫らく見合すべく候へども、『にごり江』に比して数等の下に居り候、人は『にごり江』を殊の外とりはやし候へども、

われは寧ろ材は『わかれ道』の方まされりと存じ候にも拘らず

今の評論界と申すは、一ト口にいへば、めくらの共進会に候、實際的批評すたれ科学的批評のみ行はれ居り候、世間の事何も知らず、たゞ本で覚えた理屈に当てはめて初めてなるほど、合点致すやうの連中のみに候かゝる連中にほめられ候とて何ほどの事か候べき、われを以ていはしむれば、

『にぎり江』の評判よきは彼等が夢にも知らざる事実を組合し給ひたれば大半はそれにうたれて他は評した

くとも評すべき力なき故に候、力なきと申よりは評すべき気がつかぬのに候、われは『にぎり江』には感服いたし候へども、かれ等とは殆ど反対の点に於て感服いたし候、此辺猶大に申すべきこと有之候へども、議論に涉りて長く相成候に付省き申候

御作の乱れんとするの原因についてわが疑を単刀直入に申候へば、君が多少かれ等の批評に心ひかされ給ふ所あらずやとの事に候、さる弱々しき御こゝろにては候まじけれど、たとひ彼等がほめ候ともくさし候とも一向眼にも耳にも入れ給はぬがよろしく、たゞ君が思

ふ所にまかせて、めくら共に構はず、マツすぐに進まれんことをわれは希望致候、斯くの如くにして出来そこなひ候とも決して恥には候はず、なまじいなる議論に心とめてわれとわれをいぢくり廻し候こそ却て恥と存候

約言すれば直往し給へとばかりには候へども、これ実にわれの君につげんと存じ候第一に候
猶すゝみて御身の上に及び候、但し此だんは風説のまゝを申すなれば真偽は知らず候、決して我れが悉く真事実とおもひて申すとは思召し給はるまじく候

嘗て君が浪六のもとに原稿を携へ行き給ひしとの事を聞きて、君が考の頗る異なるに不審の眉をひそめ候、此事は今申さざるべし、其後聞き候へば、君がもとに文人と称するもの大分入込み候よし、勿論深く御交際あるには候はざらんが、望むらくは夫等の輩は断然逐ひ払ひ給はん方御為と存候、いづれ参りて碌な事を申すには候はざるべく、われより察し候へば、多分それ等は世辞軽薄の少々も並ぶるに過ぎずと存候
訪問と申すことは利己か利他の二つを出でず候へどもそれ等のは利己でもなく利他でもなく、唯おもしろづ

くにまぜつ返しに参るばかりに候、其証拠は君が家に
行きて菓子をこひしに、妹御が金花糖こんぺいとうをもとめて参ら
れたりなど申すことまでも、翌日は直ぐに風聴しある
くを以ても明らかに候」

下

「此のほど中より君をおとづるゝものに碌な奴はなし
と申す事はわれは断言するに憚からず候姓名は皆存じ
居り候、われが君を訪ふことを好まずと申候は半ばは

此故に候

友は無かるべからず、心ある人々と道など語り合ふは妨なし、称へのみは文人にて俗人に劣れる（文人のいやしきは俗人のいやしきに劣り候）奴共の相手をし給ふには及ばず、よき事は少しもいはで悪しき事のみ伝へ候、チト厳めしく見せ候へば、話しするもふるへ候ほどのしろ物たちなれば、頓着なくはねつけ給ひて、やくざ共の余り参らぬやうになさるべく候、やがて何かに思ひよらぬあやまりを背負ひ給ふ事あるべくと、君の心の底はしらず候へども、われは案じ申候

われは常に孤立致し候のみならず、作家は必ずしも孤立すべきものと考へ居候、異方面の人に会ふはおもしろくとも、御宅へ此ごろ参り候やうなるやくざ文人などに取まかれ候は何の益もなく害あり候、われはやくざ共の受けよろしからず、種々の悪名を山の如く負ひ居り候へども少しも構はず、たとへも如何なれど、仏は頭に鳥の糞かゝり候とも仏たることをうしなはず、鳥の糞は一時にて、われさへ取合はずば、雨が来て洗つてくれ申候、君がやくざ共をはねつけ給ふによりてかれ等が何と申さうとも、さる事は御懸念に及ばず、精々

御遠ざけあるべく候

やくざ共の唱ふる風説一にして止まらず、果は何がしは君に結婚の事をすゝめに参りたりの、君は君よりも想の低き何がしと其約ありのと、人間の大事までもよくもきはめず風聴致居候、われは此風説の内申度き箇条少々あれど、まことか嘘かの分を分きかね候まゝここに記さず候、さし当る所は先づ以上の二件に候、おそらくは君は文界の内情など知り給ふまじければ、些細の事とおぼし召さんか知れず候へども、われの考へ候ところにては、等閑……

最後に御断り申置くことは、今の評者をめくらすと申、文人をやくざと申候とて、何等の恩怨あるには無之、唯君の為に打割つて申までに候へば怪しみ給はざらん事を祈り申候、遺れるものは其内折を得て可申上候、性根すわらぬやからの万一にほひをかぎて何かと申さんもわづらはしければ御書面お返し申上置候、御誓言ありたれば御疑ひ申す次第には候はねど、わが昨日の書面も御覧後御序に御戻し下され度候、この書につきては御判断は君にある事に候へば御返事には及ばず、わが書面だけ封じて御送り下され候へば、其封筒はも

とより火中いたすべく候

唯今夜二時の鐘をきゝ申候、名代の悪筆乱筆順序立てゝ記したるに候はねば、よろしく御判読ありたく候
 いつかは御目にかゝる事の全く無きにも候はざるべければ、こまかくは其折になりとも

九日夜

緑 雨

一葉様」

文中「等閑」だけで後がないのは、大急ぎで写したものであるのです、その後を略したか何かであろう。多分「等

閑に付き難き事也」というような意味の文言であつたのである。写には、「いつかはお目にかゝる事の云々」という行には墨が引いてあるのは緑雨の原書に棒が引いてあつたのであろう。読めないように塗り消してなかつたところが一寸面白いと思う。

金花糖のことは、大野洒竹などから伝わつたのではないからうかと思う。大野は一葉の七周忌の時に、「一葉を初めて訪うた時に出された菓子は金花糖の鮭で、而も口に縄のついた儘であつた」と、僕に話したことがある。洒竹はかなり饒舌であつたからその当時そんな事を人に

話したかも知れぬと思う。一葉と結婚の約があると噂されたのは川上眉山である。然し、一葉の日記には、後の方になると、眉山のことを随分悪く書いてある。

緑雨が一葉を初めて訪うたのは、五月二十四日である。日記には「正太夫はじめて我家を訪ふ。ものがたる事多かり。」とあるのだ。同月の二十九日に、緑雨は二度目の訪問をして居る。これは『われから』の夫人と書生との関係に就て露伴氏と意見を異にしたので、作者の考えを尋ねに来たというのであった。日記には緑雨との応答を詳記した後で、緑雨のことを次のように書いてある。

「正太夫、としは二十九、痩せ姿の面やう、すご味を帯びて、唯口もとにいひ難き愛敬あり、綿銘仙の縞がら細かき袷に、木綿かすりの羽織は着たれど、うらは定めし甲斐絹なるべくや。声びくなれど、すみとほれるやうの細くすゞしきにて、事理明白にものがたる。かつて浪六が云ひつるごとく、彼は毒筆のみならず、誠に毒心を包蔵せるものなりといひしは、実に当れる詞なるべし。世の人さのみは知らざるべけれど、花井お梅が事につきて、何がしとかや云へる人より、五百金をいすり取りたるは此人の手腕なりとか。其眼の光

の異様なると、いふことぐくの嘲罵に似たる、優しき口もとより出ることながら、人によりて恐ろしくも思はれぬべき事也。われに癖あり、君がもとをとふ事を好まずと書したる一文を送られしは、此一月の事なりき。斯道熱心の余り、われを当代の作家中ものがたるにたるものと思ひて、諸事を打すて訪ひ寄る義ならば、何かこと更に人目をしのびて、かくれたるやうの振舞あるべきや。『めざまし草』のことは誠なるべし、露伴との論も偽にはあらざらめど、猶このほかにひそめる事件のなからずやは。思ひてこゝにいたらば、世は

やうくおもしろくも成にける哉。この男、かたきに取てもおもしろし、みかたにつきなば猶さらをかしかるべく、眉山、禿木が気骨なきにくらべて、一段の上ぞとは見えぬ。」

で、その続の所には、「逢へるはたゞの二度なれど、親しみは千年の馴染にも似たり……語る事四時間にもわたりぬ。暮ぬればとて帰る。車はかどに待たせ置つる也。」とあるのだ。斯ういう風で、相方の興味が段々深くなつて行く経路が、それから後の日記で明かに窺われるのである。

もう紙数が尽きたので、此で筆を止めるが、唯だ最後に一言して置くが、前掲の手紙から見ても、日記に書かれて居る緑雨の言で見ても、緑雨は如何にも大家らしく振るまい、且つ新派とか旧派とかいう区別を立てて、可なり頑冥な態度であるようであるが、僕が親しく交際し始めた三十年頃にはそういうようなところは殆ど無かった。明敏なる緑雨は時勢の推移を看取するに遅緩で無かつたのだらう。

日本文学電子図書館

緑雨と一葉

著 者：馬場孤蝶

制作者：宮澤一郎

底 本：「明治文壇の人々」、
ウェッジ文庫版

2009年10月26日 第1刷発行

日本文学電子図書館